

日本語における伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の
通時統語論的比較

玉地 瑞穂

June 11, 2023
The 48th Annual Conference of
Kansai Linguistic Society

はじめに

証拠性(evidentiality):

話し手の情報源を示す機能をする言語学的現象

(例: Aikhenvald 2004; Aikhenvald & LaPolla 2007)

世界の言語の中で約4分の1 :

第一次機能として証拠性のマーカールを持つ言語

「証拠性方略(Evidential strategies)」 :

テンスやムードのような動詞の語形変化や語彙的要素の
意味拡張によって証拠性を表す

(Heine & Kuteva 2002; Chappell 2008)

動詞「言う」(‘say’ verb)

伝聞証拠性マーカ―や語用論的マーカ―へと文法化

通言語的現象 (例: Aikhenvald 2004; Ahn & Yap 2014)

これまでの研究

1. 日本語の伝聞証拠性のマーカー「って」の語源についての通時的な研究

古語で引用や伝聞証拠性を表す「とて」

「と言ひて」の「言ふ」が省略されて生じた

(玉地 2015a)

2. 伝聞証拠性のマーカー「とて」と「語彙的引用構造」

「と云うて」「と言ふて」の語用論的用法の比較

(玉地 2015b)

「語彙的引用構造とは

Lexical Quitative Constructions (LQC) (Michael 2012)

動詞「言う」を使用した引用の用法を持つ言語構造

動詞「言う」から派生した伝聞証拠性のマーカーと同様、
語用論的用法を持つ。

「語彙的引用構造」を伝聞証拠性のマーカーとして扱うべきかどうか
が議論される

伝聞証拠性のマーカーと「語彙的引用構造」の識別方法

語用論的用法の違い

伝聞証拠性の語用論的用法

思いがけない新事実を得たときの驚きを表すムード(mirativity)

話し手の命題に対する認識性(epistemicity)

(例： Wang, Katz & Chen 2003; Leuong 2006, Ahn & Yap 2007)

「語彙的引用構造」の語用論的用法

話し手が前の話し手に対する異論を表す用法

(例： Güldemann 2008)

伝聞証拠性のマーカー「とて」の 語用論的用法の例

- (1) 現在我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が
母は衣裳を着飾って。
おめのとよお局よと玉の輿に乗ったとて。

(丹波与作待夜の小室節, p. 101, 1707)

思いがけない新事実を得たときの驚きを表すムード

「語彙的引用構造」

「と云うて」と「と云ふて」の語用論的用法の例

(2) 詞： ……もはや毒も何もかまはず氣任せにしたがよい。
アア惜しい人じゃ。

夕霧： **と云うて**。

(夕霧阿波鳴門, p.212,1712.)

(3) 左嶋：「ハテ扱」

桂：「じゃ**と云ふても**」

(幼稚子敵討、p.246、1753)

話し手が前の話し手に対する異論を表す用法

本研究の目的

通時的コーパスを用いて伝聞証拠性のマーカー「とて」と「と云うて」・「と云ふて」が語用論的用法を持つに至る過程を統語論的観点から比較する

データ:

大系本文データベース(国文学研究資料館)

8世紀から19世紀までに書かれた歌集や歴史的
文書、物語、随筆、狂言の台本、小説などを収録
した日本古典文学大系(岩波書店)を電子化

研究方法

「とて」、「と云うて」、「と云ふて」の用法を分析
動詞「言ふ」の標準的意味(canonical 'say')、
引用、伝聞証拠性、語用論的用法などに分類

統語論的環境を分析

(従属節の最後、主節の最後に位置するかなど)

「とて」の意味変化

動詞「言ふ」の語彙的意味用法

(4) 汝さへ嫁を得ずとて捧げては下し

(神楽歌、p.323、8th c.)

引用の用法（情報源を明示する副詞句＋とて）

- (5) 翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給(ふ)べき人なめり」とて、手にうち入れて家(へ)持ちて來ぬ。

(竹取物語, p.29, 10th c.)

引用の用法（情報源を明示しない）

- (6) 「もし人とはば是をたてまつれ」とて、文書きて出しける、

(大和物語, p.352, 951)

引用の用法（文末）

(7) 「いと、むつかしげに侍れど、かしこまりをだに」とて。

（源氏物語, p.210, 1001）

伝聞証拠性

(8) わかきをとこ持ちたるだに見ぐるしきに、
こと人のもとへいきたるとてはら立つよ。

（枕草子, p.93, 1001）

伝聞証拠性 (文末)

- (9) 二月晦がたよりはなほ楼にて習はしたてまつりたまふ。
山の景色色づく見るも、いとおかしとて。

(宇津保物語, p. 474, 10th c.)

語用論的用法 (緩和)

- (10) 浄土僧: でもそなたが急ぐによって、
愚僧も急いだ。

法華僧: いかに急げばとて。

(出家座頭狂言 宗論, p. 22, 14th c.)

語用論的用法（強調）

- (11) はてやかましよう言はひでもこちらから
お目にかける^{とて}。

（八百屋お七, p. 79, 1668）

語用論的用法（予想外の驚き）

- (12) 現在我が子に馬追させ。男の行方も知らぬ身が
母は衣裳を着飾って。
おめのとよお局よと玉の輿に乗った^{とて}。

（丹波与作待夜の小室節, p. 101, 1707）

「とて」の意味変化と統語論的環境の変化

語彙的意味
「言う」 → 引用 → 引用
(文末) →

→ 伝聞証拠性 → 伝聞証拠性 → 語用論的用法
(文末) (文末)

「と云うて」の意味変化

「ウ音便化」によって「と言ひて」が「と云うて」に変化したもの
(Frellesvig, 1995 pp.21)

動詞「言ふ」の語彙的意味用法

- (13) かくのごとく言ひはてて、「冠もて来」というてなん、
とりてさし人ける

(宇治拾遺物語、p.363、11th c.)

引用の用法

- (14) 鳥告て云、「國の大王、おほくの狩人を具して、この山をとりまきて、すでに殺さんとし給。今は逃べきかたなし、いかにすべき。」**というて**、泣く泣くさりぬ。

(宇治拾遺物語, p.218, 13th c.)

語用論的用法（文末：反復）

- (15) 太郎冠者：申し呼ばせられまするか。
主：「申し呼ばせられまするか。」**というて**。
なぜに鶯のことをぐいすと言うたぞ。

（小名狂言「擦化」， p.338, 14-15th c.）

伝聞証拠性の用法

- (16) これは附子**というて**、あの方の吹く風に當ってさえ、
そのまま滅却するほどの大毒な物じゃ。

逆接の用法（と云うて ＋ も）

- (17) 沙那王殿ぢや**と云うても**鬼神ではあるまいぞ。
(宮増関係の能 鞍馬天狗, p.74, 14-15th c.)

逆接の用法

- (18) 大名： いかにも子どもが愚鈍な**と云うて**、物によそえて
覚えられぬことはあるまい。
(大名狂言 秋大名, p.187, 14-15th c.)

語用論的用法

- (19) 詞： ……もはや毒も何もかまはず氣任せにしたがよい。
アア惜しい人じゃ。
夕霧： **というて。**

(夕霧阿波鳴門, p.212,1712.)

「と云うて」の意味変化と統語論的環境の変化

語彙的意味
「言う」 → 引用 → 語用論的用法
(反復的用法)
(文末)

→ 逆接 → 伝聞証拠性 → 語用論的用法
(異論)
(文末)

「と言ふて」の意味変化

母音の挿入によって「と言ふて」から派生したものの

動詞「言ふ」の語彙的意味 > 強調的用法

- (20) なにといふてもおもふによらぬわかみや。
いつくしいはほんとうとのこのすかたよ。

(田植え草子、p.290、14-15th c.)

引用の用法

- (21) 住持はや現になつて、「夜前、あなた方入ひで叶わぬ子下風薬を、人に習ふて参つた」といふて、跡にてふさぎもおかし。

(好色一代女、p.363、1682)

伝聞証拠性の用法

- (22) ふたりが中は比翼といふて、おもひ死をさした。

(好色一代女、p.114、1682)

逆接の用法（と言ふて + も）

(24) 居よ**といふても**爰には居ぬ。

（夏祭り浪花鑑、p.238、1745）

逆接の用法

(25) いかに子供じゃ**といふて**あんまりな。

（夏祭り浪花鑑、p.267、1745）

語用論的用法（異論を表わす）

(26) 隼人：「こりゃこりゃ、主人には覚期の生害。
見苦しい。扣いてやれ。」

名山：「それじゃといふて。」

（韓人漢文手管始、p.367、1789）

(27) 左嶋：「ハテ扱」

桂：「じゃといふても」

（幼稚子敵討、p.246、1753）

「と言ふて」の意味変化と統語論的環境の変化

語彙的意味 → 引用
「言ふ」

→ 逆接 → 語用論的用法
(異論)
(文末)

「とて」と「とてうて」・「とてふて」が語用論的用法を持つに至る統語論的变化の比較

「とて」の場合

文末における伝聞証拠性のマーカーへと発展した後、
語用論的用法を持つようになった

他言語における伝聞証拠性のマーカーと類似

(例 : Leuong 2006, Ahn & Yap 2014)

「と云うて」の場合

1. 引用のマーカーへと発展した後、語用論的用法を持つ
2. 逆接の用法を持ったのち、語用論的用法を持つ

「と云ふて」の場合

逆接の用法を持ったのち、語用論的用法を持つ

「語彙的引用構造」は伝聞証拠性の用法に発展しなくても語用論的用法を持つ

「語彙的引用構造」が語用論的用法を持つためには、逆接の用法に発展する過程を経る

- (19) 詞： ……もはや毒も何もかまはず氣任せにしたがよい。
アア惜しい人じゃ。
夕霧： **というて**。

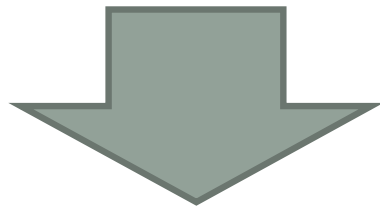
「**というて**」の前に存在する補語句が省略されている

- (26) 隼人： 「こりゃこりゃ、主人には覚期の生害。
見苦しい。扣いてやれ。」
名山： 「それじゃ**といふて**。」

「**といふて**」の前に存在する補語句が指示語に置き換えられている

- (27) 左嶋: 「ハテ扱」
桂: 「じゃ**といふても**」

「と言ふて」の前に存在する補語句がコンピュータに置き換えられている



前の話し手の発話を繰り返し、それに反応するという文脈で用いられている

語用論的用法を持つと同時に、文頭における談話的マーカーのような役割も持つ

参考文献

- Ahn, Mikyung & Foong Ha Yap. 2014. On the development of Korean ‘say’ evidentials and their extended pragmatic functions. *Diachronica* 31(3): 299-336.
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Evans, Nicholas. 2007. “Insubordination and Its Uses.”. In I. Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366–431. Oxford: Oxford University Press.
- Güldemann, Tom. 2008. *Quotative indexes in African languages: A synchronic and diachronic survey*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Leung, Wai-mun. 2006. On the synchrony and diachrony of sentence final particles: The case of *wo* in Cantonese. PhD dissertation, University of Hong Kong.
- Michael, D. Lev. 2012. Nanti self-quotation: Implications for the pragmatics of reported speech and evidentiality. *Pragmatics and Society* 3(2): 321-357.